

第 304 回京都市考古資料館文化財講座 / 京都アスニー京都学講座

連続講座『京都の飛鳥・白鳳寺院』第 4 回

2019 年 4 月 27 日

## 北白川廃寺と法観寺

（公財）京都市埋蔵文化財研究所　柏田有香

### 1. 法観寺の概要

●現在の寺名は靈応山法観寺で、臨済宗建仁寺派の寺院である。古代には「八坂寺」と称された。仁治元年（1240）に建仁寺八世済翁証救が入寺して禅寺となり、現在の寺号に。

●京都市東山区八坂上町に所在。東山西裾の台地の東から西に傾斜する斜面上に立地。南には台地を開削する谷。←伽藍配置に影響か。

●創建年代は、聖徳太子創建説、天武天皇 6 年 (678) 高麗人創建説、小野篁「舎弟」による天長 10 年 (833) がある。いずれも、中世の史料が根拠。

・文献史料上の初見は『続日本後紀』承和 4 年（837）「八坂寺」の記述あり。

・造営主体は愛宕郡八坂郷を本拠とした、狛人八坂造であったとする説が有力。

・八坂の塔は京都の代表的ランドマークのひとつ。現在の塔は 4 代目。

　初代の塔は、治承 3 年（1179）に焼失、建久 2 年（1191）に源頼朝の援助により再建。

　2 代目は、正応 4 年（1291）に焼失、延慶 2 年（1309）に後宇多天皇の援助で再建。

　3 代目は、永享 8 年（1436）に焼失、永享 12 年（1440）に足利義教の援助で再建。←現在の塔。

●古代の伽藍配置については、法隆寺式伽藍配置説（石田茂作）、四天王寺式伽藍配置説（田中重久）、塔を中心とする一堂一塔説（網伸也）などがある。

### 2. 法観寺の発掘調査

●昭和 52 年（1977）調査　塔基壇周囲と基壇北側の断割調査。旧基壇の版築層を確認。塔基壇が現位置を保っていたことが判明。心礎も動いていない。

●平成 21 年（2009）調査　塔基壇周囲で、瓦を多量に含む整地層と、塔基壇を巡る排水溝を発見。整地層は源頼朝再建期のものか。整地層や溝から多数の古代瓦が出土。南滋賀廃寺や穴太廃寺など近江大津宮周辺寺院との関連が想定できる。軒瓦の年代から創建は 7 世紀第 3 四半期と判明。整地層から瓦とともに埴仏の破片が出土。火頭形三尊埴仏の左脇侍の部分と判明。

### 3. 火頭形埴仏出土の意義

・祖形となった埴仏は、中国西安市の大慈恩寺大雁塔周辺で多数出土している。この埴仏の日本請来の契機については、唐に渡り玄奘三蔵に師事した僧道昭が、経典や舎利とともに持ち帰った説が有力。

・同形埴仏の分布は、平城京西郊外の阿弥陀谷廃寺から交野、八幡、大山崎、そして近江の穴太廃寺であったが、大山崎と穴太廃寺の間の法観寺で出土したことによって伝播ルートが明確に。飛鳥東南禅院から近江への道昭の遊行ルートを示す物的証拠として重要。背景には天智朝の世情不安も。

### 4. 北白川廃寺の概要

●京都盆地北東部、瓜生山から延びる丘陵先端付近に位置し、東から西に傾斜する地形に立地。現在は住宅地となっている。

●創建年代は 7 世紀後半、粟田氏創建の「粟田寺」とする説がある（吉野 2018）。

●伽藍配置は、東に金堂を回廊で囲む金堂院、西に塔を掘立柱塀で囲む塔院。北野廃寺や大宅廃寺と強い共通性をもつ（網 1993）。

### 5. 北白川廃寺の主要発掘調査

●昭和 9 年（1934）　瓦積基壇（東方基壇）を検出。基壇規模東西 35.7 m、南北 22.7 m と巨大。

●昭和 49 年（1974）　東方基壇の西約 80 m で、瓦積基壇から乱石積基壇に改修された塔基壇を検出。

●昭和 55 年（1980）　東方基壇の西で、南北方向の基壇（西方基壇）を検出。立会調査では、東方基壇の北で基壇を検出。いずれも東方基壇をめぐる回廊基壇と考えられる。

●平成 2 年（1990）　東方基壇の西で南北溝を検出。塔基壇の北で東西築垣と雨落溝を検出。

●平成 17 年（2005）　西方基壇回廊の南西隅部を検出。金堂院を形成していることが確定。

●北白川廃寺の南隣に位置する小倉町別当町遺跡の調査　6 世紀に開発される集落遺跡。7 世紀後半の竪穴建物多数。集落としては 9 世紀まで継続。無文銀銭や唐三彩、瓦塔など特殊な遺物が出土。北白川廃寺の軒瓦も出土。寺院と密接な関係。

### 6. 北白川廃寺の特殊性

・規模の大きすぎる金堂、造営に関わったと考えられる小倉町別当町遺跡で出土した特殊な遺物の存在→一氏族の氏寺と考えて良いのか？

・出土遺物からは、近江と密接な関係が、出土瓦からは、大和と密接な関係が窺える。造営には近江朝、あるいは大和の中央政権の積極的な介入があった可能性。

・大和と近江を結ぶ主要交通路であった山科盆地を抜けるルートとは別に、近江から山中越を抜け、鴨川左岸に出て、南や西とをつなぐ交通路の要衝にある立地に注目。

<参考・引用文献>

石田茂作「八坂寺」『飛鳥時代寺院址の研究』復刻版　第一書房 1977 年

田中重久「法観寺創立の研究」『考古学』第九卷第二号　1938 年

網　伸也「北白川廃寺の伽藍復元 - 最近の発掘調査成果による -」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会 1993 年

網　伸也「北白川廃寺の造営過程 - 北山背古代寺院の考古学的考察 -」『古代』97　1994 年

網　伸也「八坂寺の伽藍と埴仏」『技術と交流の考古学』同成社 2013 年

網　伸也「畿内の古代寺院と道昭」ミニシンポジウム古代山崎の架橋と造寺～行基の前史、道昭の事蹟を探る～資料　大山崎町教育委員会　2018 年

長戸満男「無文銀銭試論」『研究紀要』第 10 号　（財）京都市埋蔵文化財研究所　2007 年

堀　大輔『飛鳥・白鳳の藁 - 京都市の古代寺院 -』京都市文化財ボックス第 24 集　2010 年

吉野秋二「愛宕郡の氏族と古代寺院」第 46 回古代寺院史研究会資料　2018 年

『史跡法観寺境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-11（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2010 年

「北白川廃寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成 17 年度』京都市文化市民局 2006 年

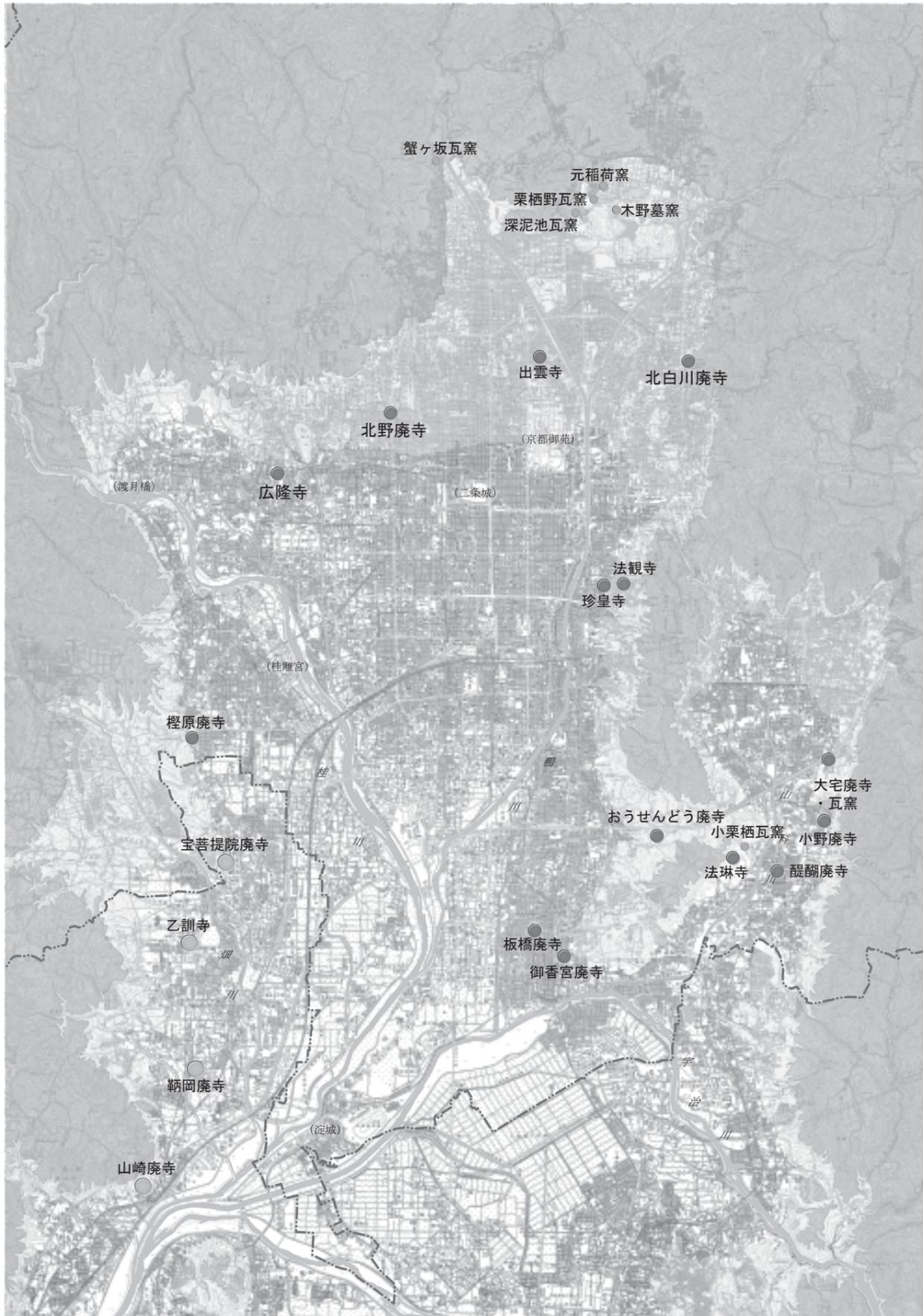


図 1 飛鳥白鳳寺院位置図 (1 : 100,000)

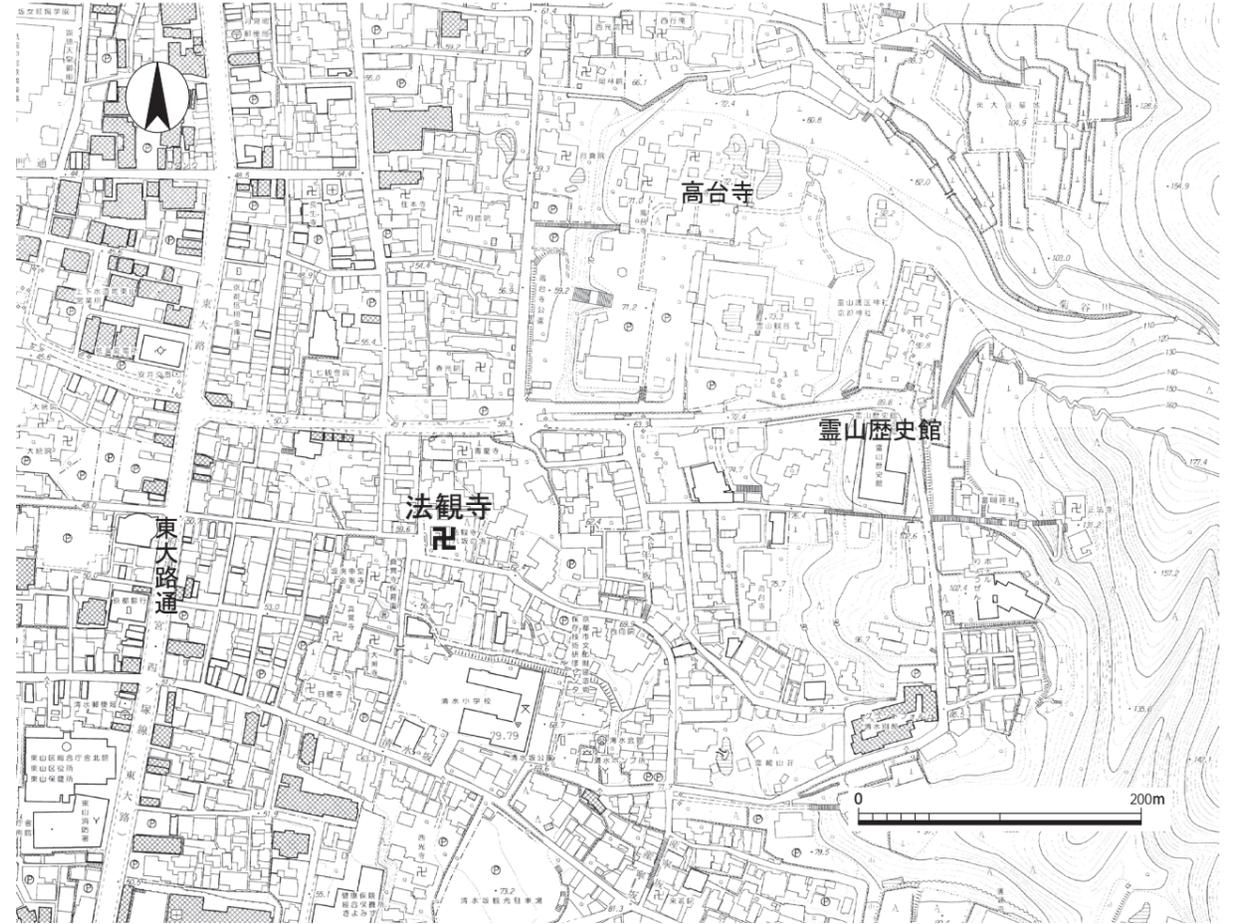


図 2 法観寺位置図 (1:5,000)



法観寺遠景 (南南東から、旧清水小学校屋上から撮影)

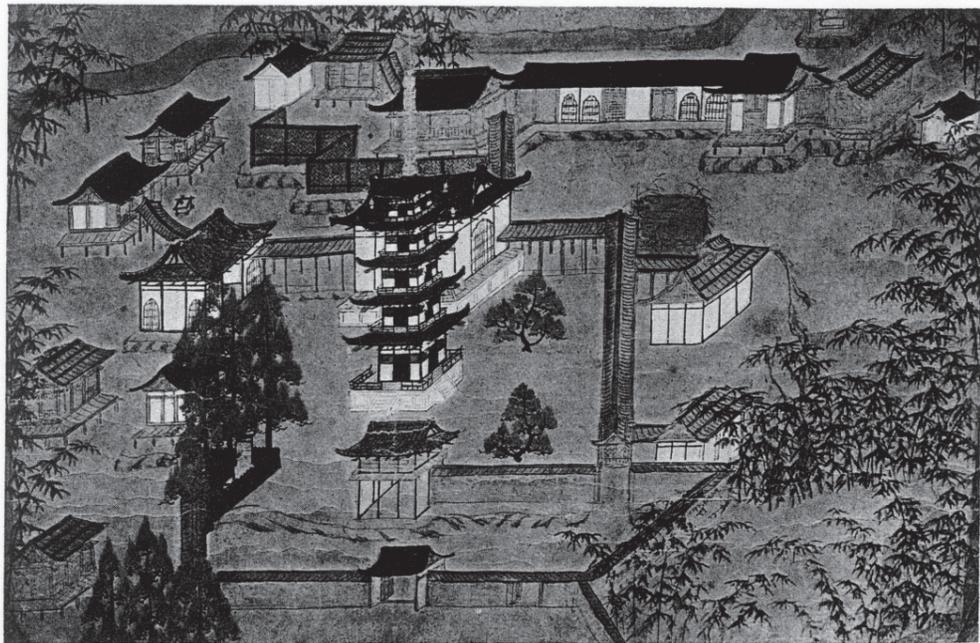


図3 法観寺伽藍配置図（寺蔵）  
田中 1938 より引用



図4 法観寺永享伽藍図（寺蔵）  
田中 1938 より引用

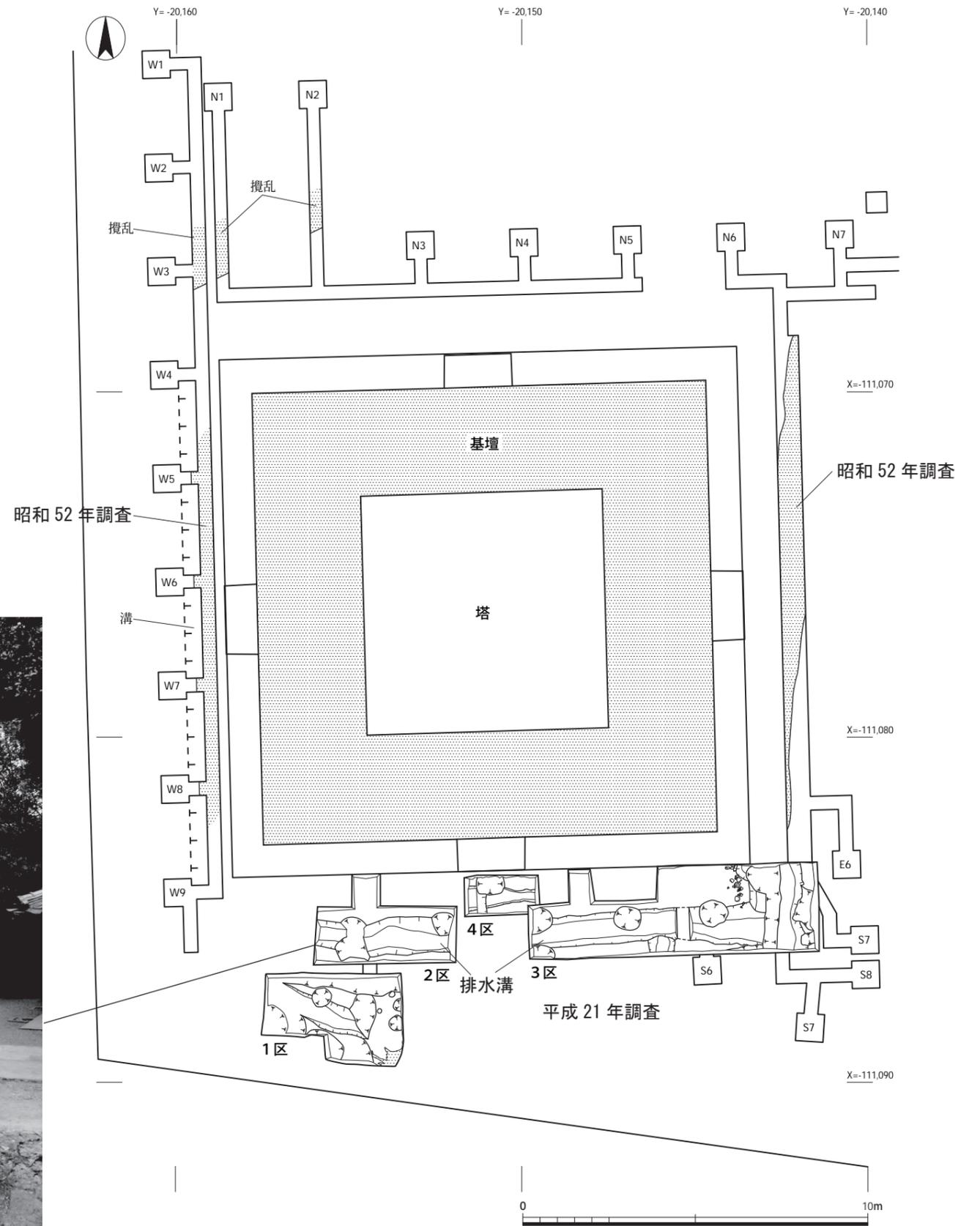


図5 法観寺調査区配置図（1 : 150）



図6 平成 21 年調査出土軒丸瓦

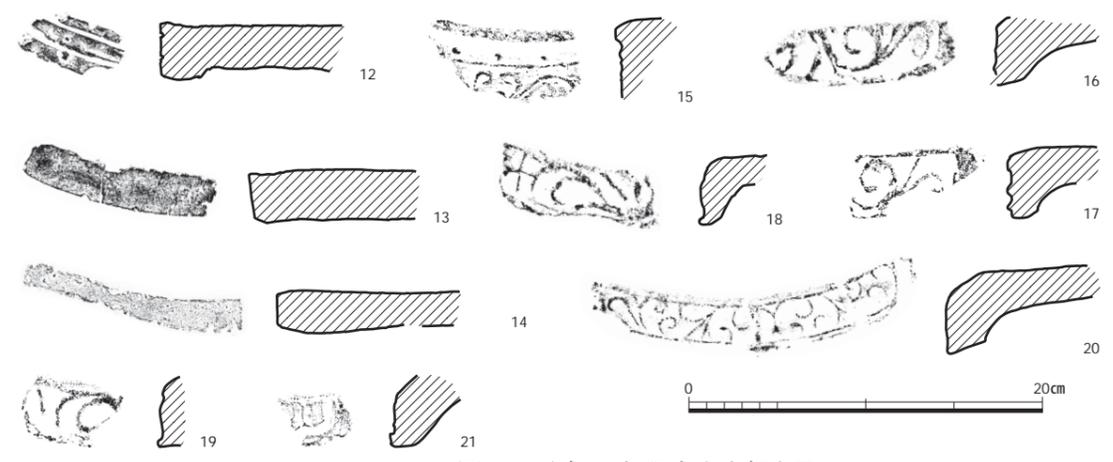


図7 平成 21 年調査出土軒丸瓦

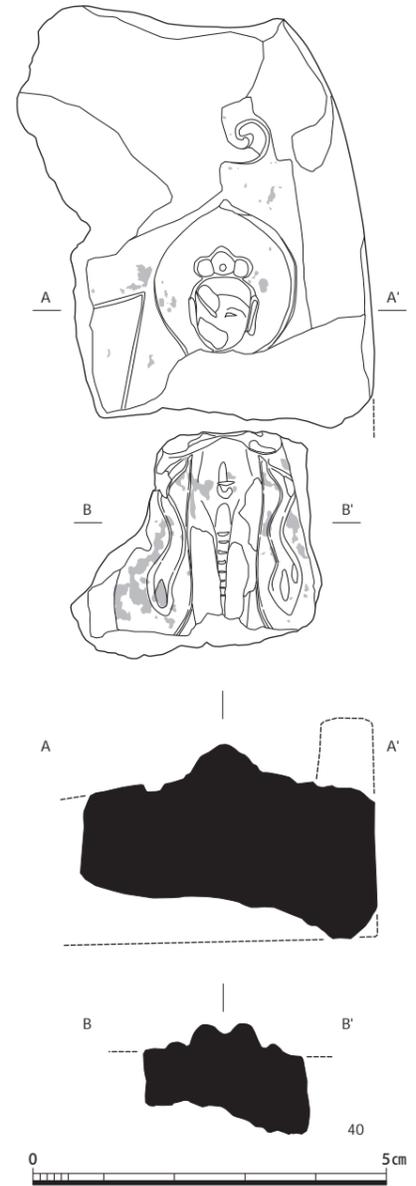


図8 平成 21 年調査出土埴仏

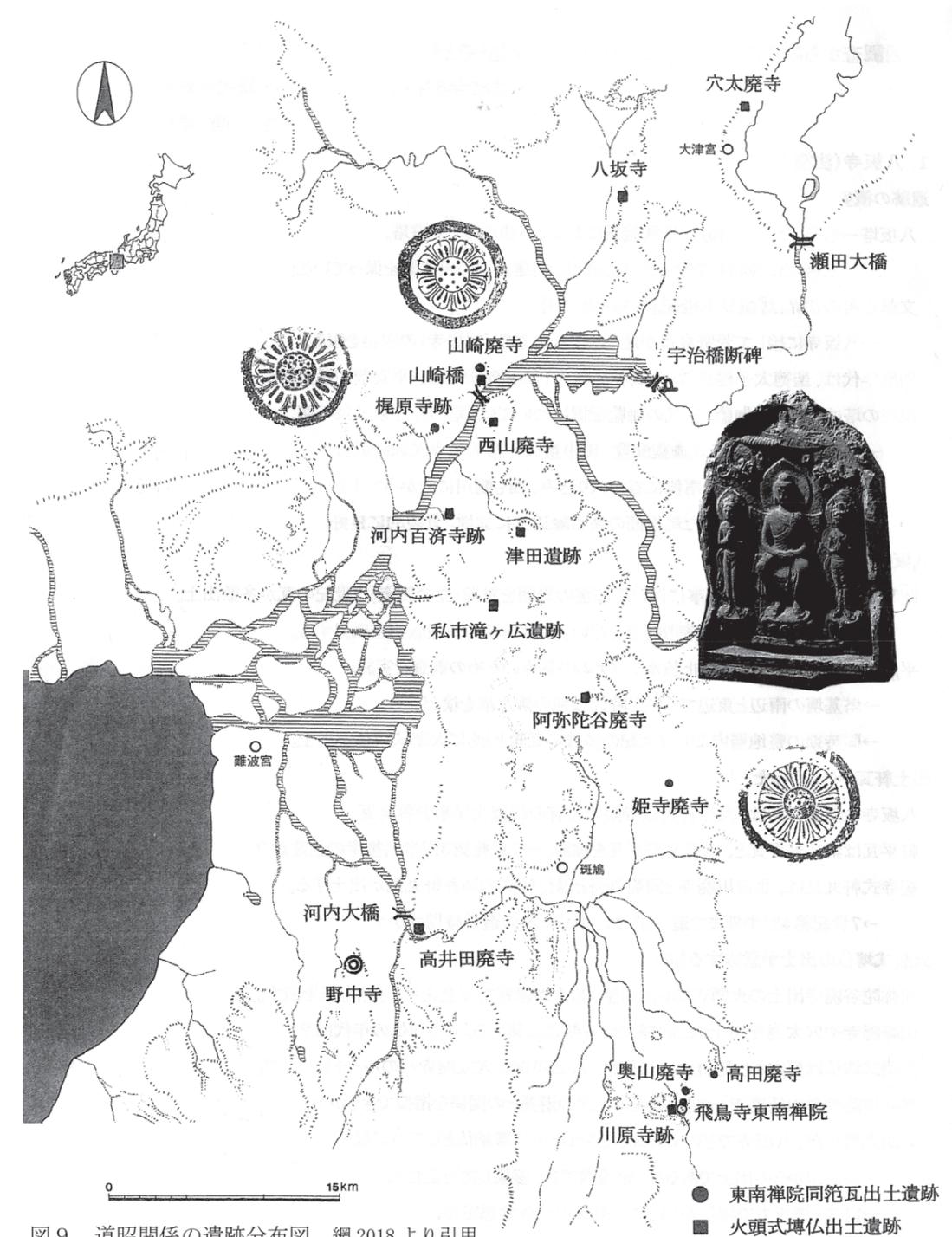
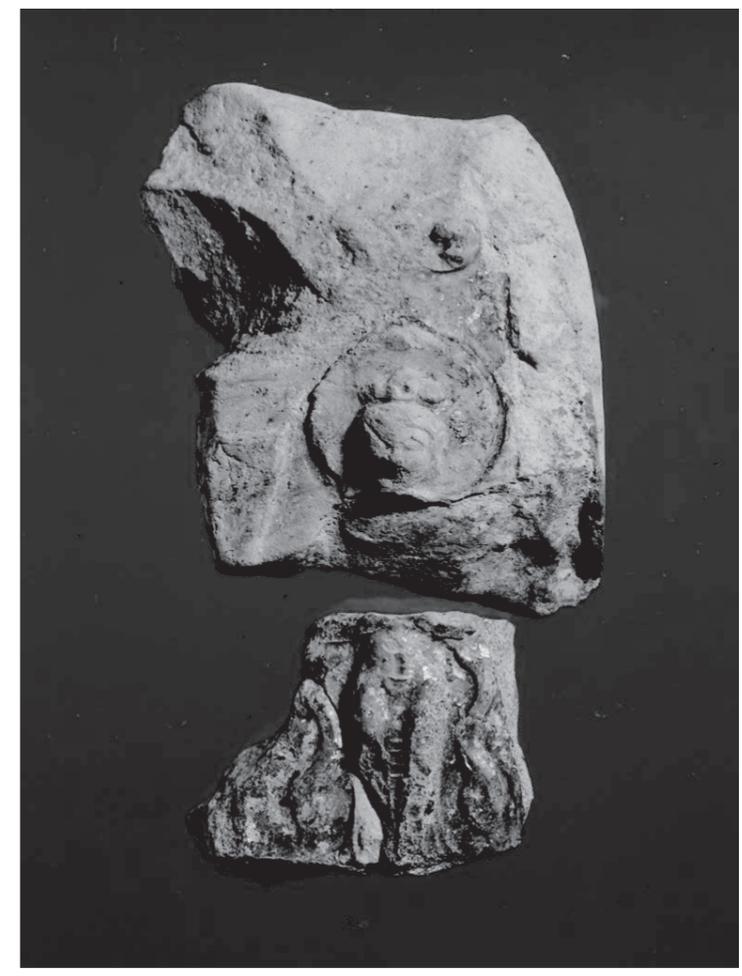


図9 道昭関係の遺跡分布図 網 2018 より引用

- 東南禅院同範瓦出土遺跡
- 火頭式埴仏出土遺跡

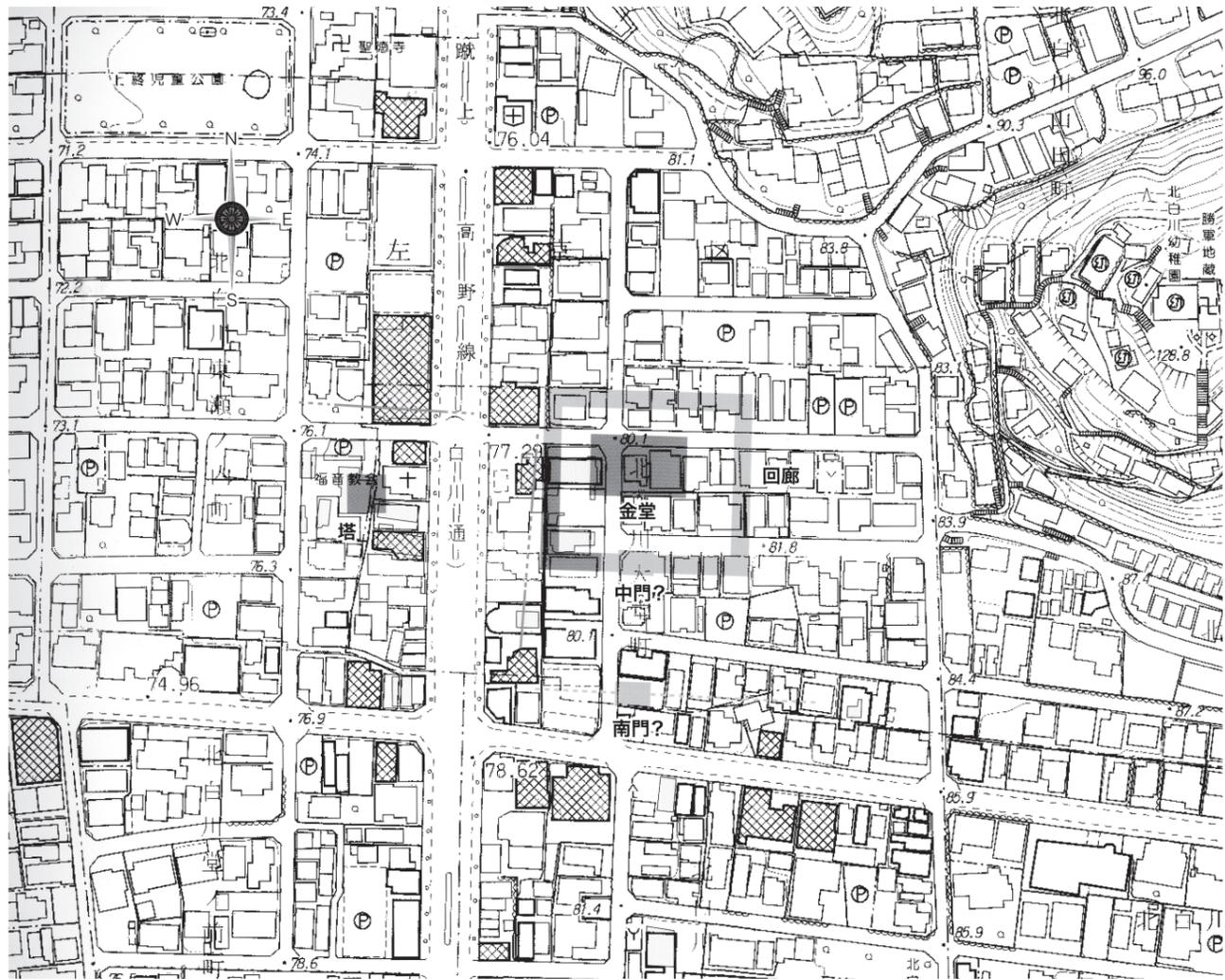


図10 北白川廃寺位置図 (堀 2010 より引用)



平成17年調査 金堂南面回廊 (東から)

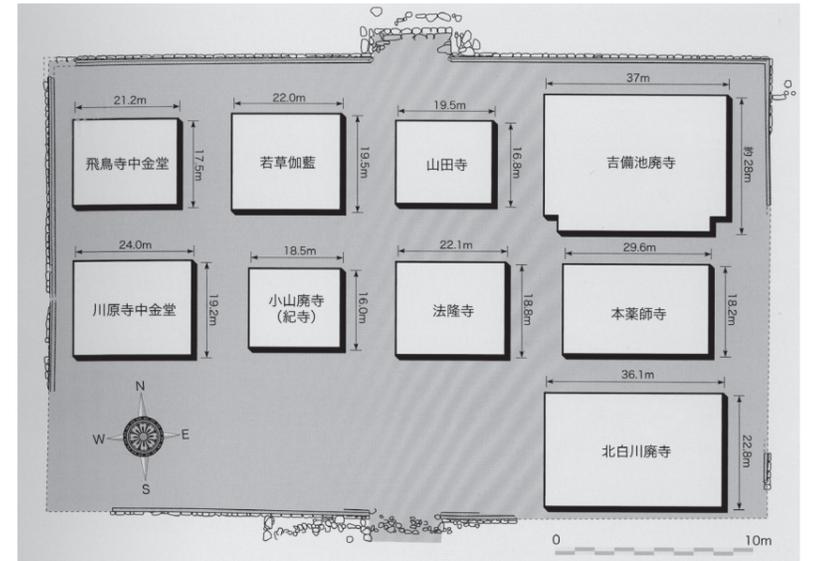


図12 飛鳥白鳳時代の主な古代寺院金堂基壇規模の比較 (堀 2010 より引用)



平成7年調査 塔基壇 (北西から)

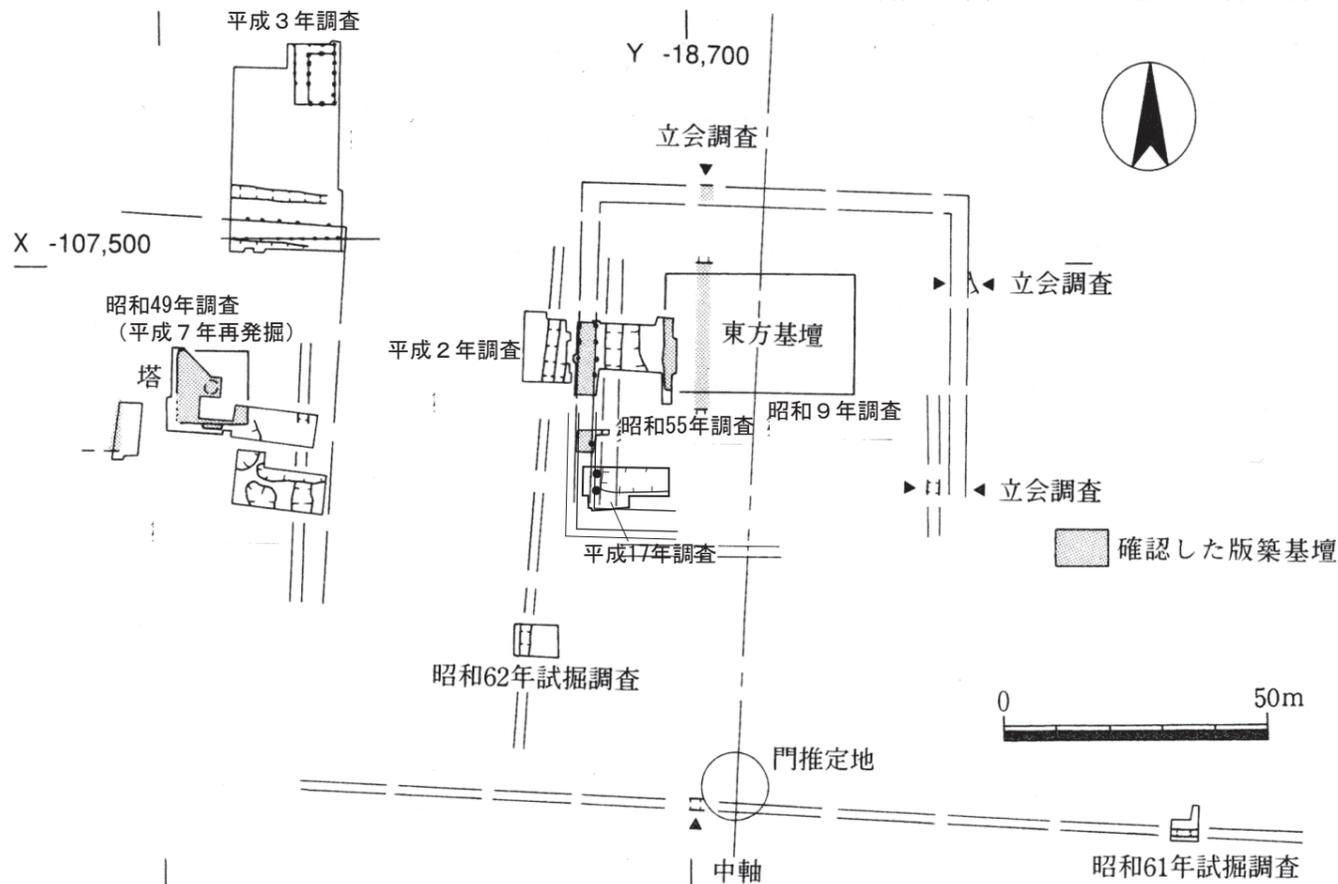


図11 北白川廃寺調査位置図 (網 1993 の図を一部改変)

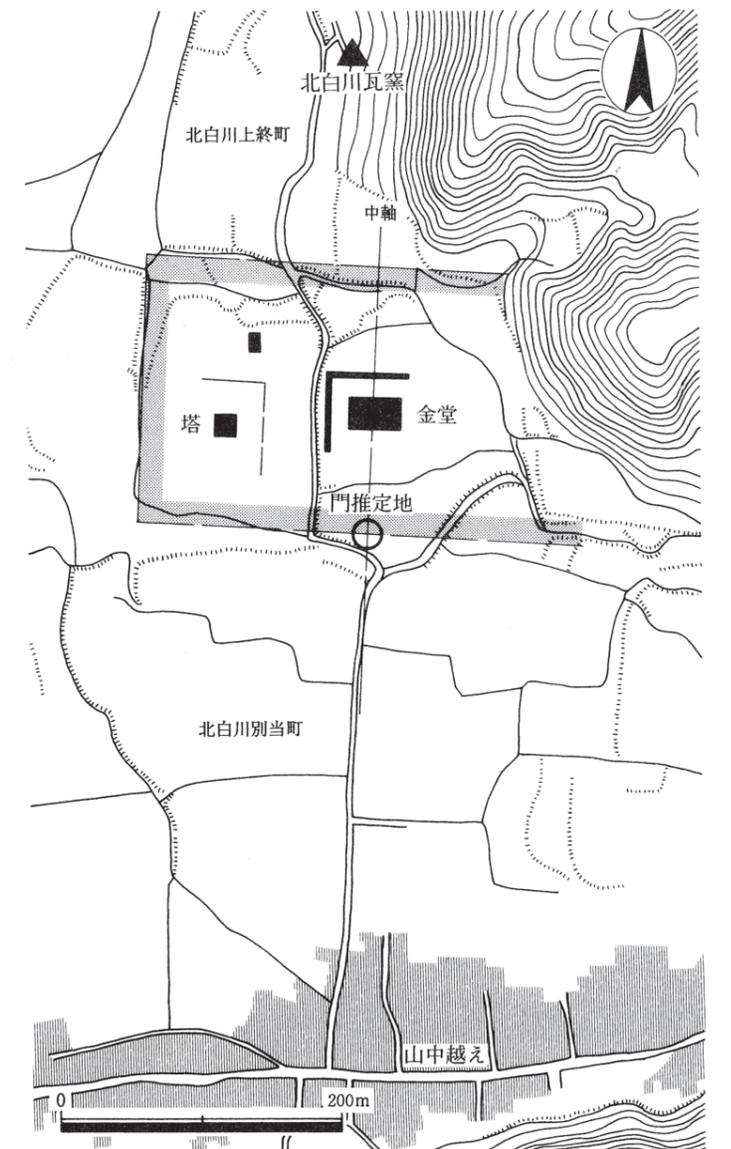


図13 北白川廃寺伽藍と旧地形 (網 1993 より引用)

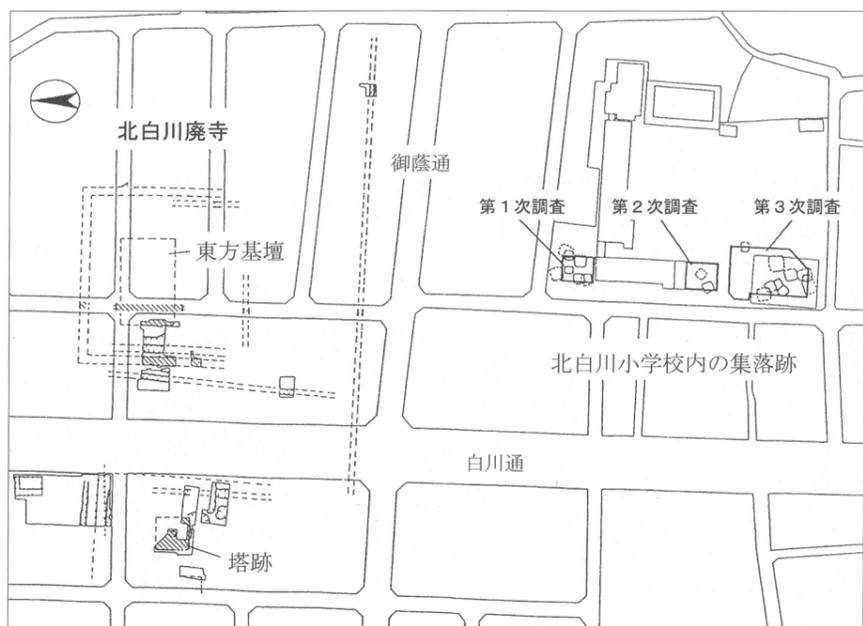


図14 小倉町別当町遺跡調査位置図 (1 : 3,000)  
(長戸2007より引用)

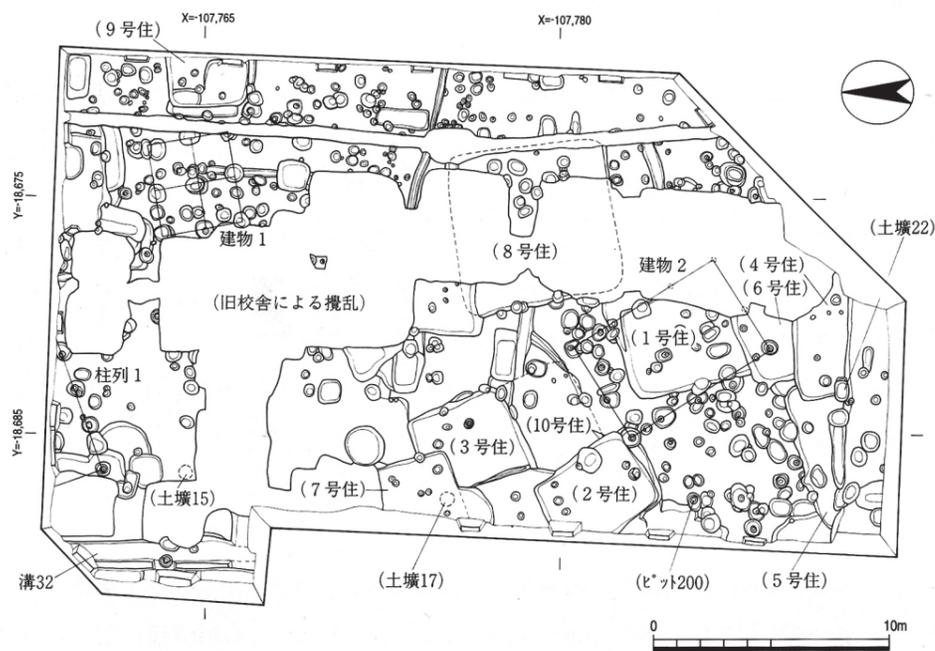


図15 小倉町別当町遺跡第3次調査平面図 (1 : 300)  
(長戸1996より引用)

関連年表

西暦	事項
629	道昭、河内国丹比郡に船連恵釈の子として誕生
645	乙巳の変(大化改新)起こる
653	道昭、遣唐留学生として入唐、玄奘三蔵に師事
660	百済が唐・新羅連合軍に滅ぼされる
661	道昭、帰国、多数の経論を将来
662	道昭、飛鳥寺東南禅院を創建、その後天下周遊へ
663	白村江の戦い
667	中大兄皇子、近江大津宮へ遷都
668	天智天皇即位。高句麗滅亡
670前後	道昭、宇治橋改修、山崎橋架橋か
672	壬申の乱、飛鳥浄御原宮へ遷都
673	天武天皇即位、道昭東南禅院へ還る
694	藤原京へ遷都
700	道昭、東南禅院で死去、火葬される
710	平城京へ遷都

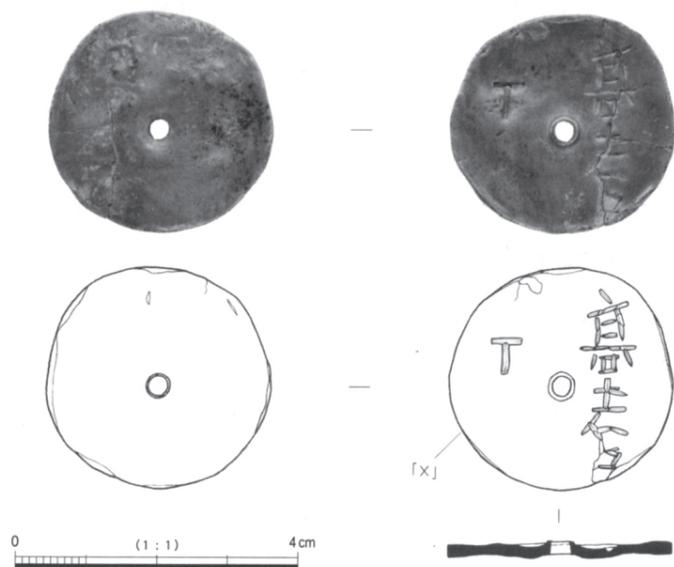


図16 小倉町別当町遺跡第3次調査出土無文銀銭 (1 : 1)  
(長戸2007より引用)



文字部分拡大

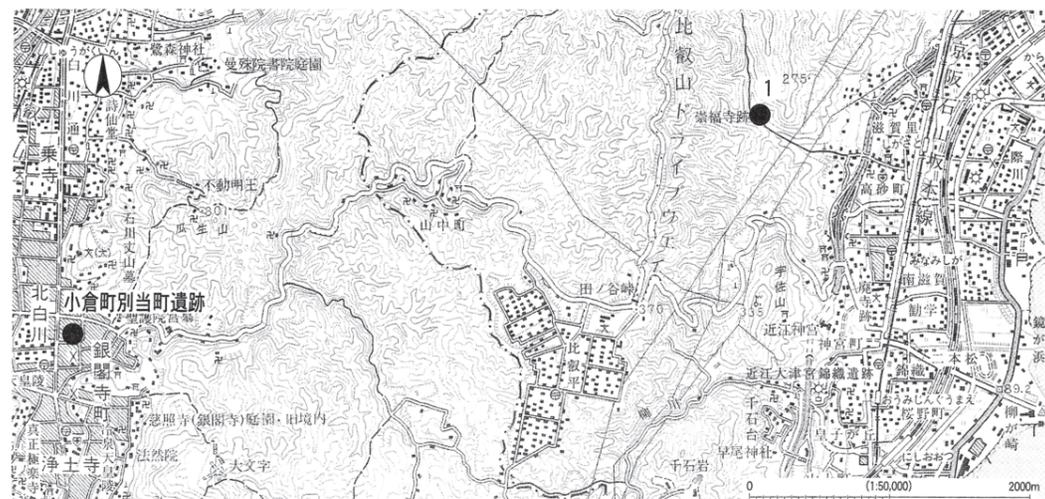


図17 小倉町別当町遺跡と崇福寺の位置関係 (長戸2007より引用)